不定期刊行　　第623号　2017.10.11

# 中信高校山岳部かわらばん

編集責任者　大西　浩

## 山岳部秋山合宿　ＩＮ　パノラマ銀座

この連休、大町岳陽高校は秋山合宿を行った。本当は昨年のリベンジ（かわらばん591号、592号参照）で、２泊３日で蝶ヶ岳から常念岳、大天井岳、燕岳をこえて東沢まで足を延ばす予定だったのだが、連休初日は悪天が予想されたので、日程を１泊２日に短縮。コースも一の沢から入山し、常念岳から燕岳まで縦走して中房温泉に下山するコースに短縮した。このコースは、北アルプスの盟主ともいうべき槍穂高の好展望をほしいままにすることから、近年パノラマ銀座コースと命名された人気のコース。

２日間好天に恵まれた上に、紅葉の最盛期。暑くもなく寒くもなく、気候もバッチリ。これぞ「山のだいご味」という感動を味わってきた。初日の常念、２日目の大天井の山頂で山岳部歌を歌ってきた。

このコースは、大町岳陽高校の全校登山のコースの一つでもある。今年は悪天候のため、全校登山が中止になってしまった。全校登山では当然山小屋に泊るのだが、山岳部はテント泊、食事も自分たちで作る。手間がかかり、荷物も重い。テント生活は山小屋のような快適さとは程遠い。それでも、小屋泊りとはまた一味違った楽しさがそこにはある。

このコースには、途中、常念小屋、大天荘、燕山荘という全校登山でお世話になる３つの山小屋がある。それぞれの山小屋に顔を出してあいさつした。常念小屋では支配人の山崎さんが下山して不在だったが、よくいらっしゃいましたと、テン場代と水代をサービスしてくれた。大天荘では、今年はうかがえずに残念でしたというと、支配人の榊さんが、「いいえ、天気がすべてですから、安全登山のためには仕方ないです。また来年お待ちしています。」とコーヒーをごちそうしてくれた。燕山荘でも社長の赤沼さんが「大西先生よく寄ってくれました。お茶でもどうぞ。」と、一緒にコーヒーを飲みながら、ひとしきり山談義。支配人の林さんからも「やはり、夏に大町岳陽さんが来ないとさびしいですね。でも、大町から岳陽になっても、この行事がつづくということは、大町にある学校としての矜持、これからもぜひ続けてください。」とそれぞれの小屋で熱いエールをいただいた。

今年全校登山ができなかったのはなんとも残念なことだったが、山小屋の方でも大町岳陽高校の全校登山は小屋の風物詩になっていることを改めて感じたことだった。山岳部の合宿としては久々に天候に恵まれたパノラマの山旅で、心の洗濯ができた２日間だった。

常念岳山頂、槍穂を背に

燕岳山頂で青空をバックに

# 高校教員（生徒）向け雪崩講習会続報

前号でお知らせした高校山岳部顧問向けの雪崩教育プログラムについて、山と渓谷の10月号に「雪崩事故再発防止に向けて研究者グループの取り組み」という記事の中で紹介されている。詳しくはこちらの記事をお読みいただければいいが、防災科学研究所や宇都宮大学、立山カルデラ砂防博物館など11機関計31人からなるグループが、栃木県那須町でおきた雪崩事故後、地道な調査研究を続けている。

掲載記事は、そのメンバーらによって7月14日に開かれた現地報告会のレポート記事だが、その会議の中で防災教育を専門に研究している宇都宮大学の近藤伸也さんが、この「高校山岳部顧問向けの雪崩教育プログラム」を提案したということが取り上げられている。近藤さんの呼びかけに対し、小生も現場の実情をお話しする中で、このプログラムが実現できる後押しをしてきた。

具体的には、さまざまな条件を考慮しながら、登山を引率する教員を対象にした研修を考えている。

① 1泊2日の研修

② 複数のコースを設定し、目的や力量に応じて選択できる形

③ 特定の場所で行う集中型研修と各地で行う地域別研修を組み合わせる。

イメージとしては、基礎３～４コース、上級１～２コースなどの構成で、各コースは講義と技能演習で学ぶ。・・・自分はもちろん生徒の身を守るために最低限必要な知識・技能・態度を身に着けるということを、防災教育という観点を取り入れながら、登山の教育を応用して実践しようというものだ。詳しくは、山と渓谷１０月号をご覧いただきたいが、各県レベルでこれから冬にかけて研修会や講習会を企画しているところがあれば、ぜひ一声お声がけいただければと思う。全体のカリキュラムの一部なりとも取り入れながら今後継続的にこのプログラムを取り入れ、内容を精選していく中で、高校山岳部の雪崩防災教育が一歩前進できればすばらしいと考えている。

前号でのご紹介の後、福島県、三重県からもぜひこのプログラムを活用したいというお申し出をいただいた。日程的なもの、人的な部分の絡みもあるので、早いもの順にできる部分に対応していきたいと思う。再度のお声がけですが、興味のある方はぜひご検討いただき、ご連絡ください。

# 編集子のひとりごと

あの残念な雪崩事故から6か月余りが経過した。この間、この事故をめぐって様々なことが小生の周りで起こった。事故検証委員として12回栃木県を訪れ、最終報告書が来週の日曜日にはまとめられる。長野では高校生の雪山登山のルール作り委員会の答申もおわり、積雪期登山におけるガイドラインが近く県教委から示されることになる。国立登山研修所の安全登山指導者中央研修会に高校山岳部顧問対象コースが設けられ、11月には実施の運びとなり、12月には高校山岳部顧問に向けての研修会も特設された。スポーツ庁でも高校山岳部の冬山登山を今後どうするのかという検討がはじまり、来週はそこでの現状報告をすることになっているが、こちらも冬山全面禁止というような方向には進まないのではないかという見込みがある。事故は残念なことであったに違いないが、事故を機に、今後の安全教育が考えられはじめたことは一定の評価ができるし、亡くなった方々の遺志を継ぐことにもなろうかと思っている。（大西記）